7801 kuraku 久楽 東海道 53 次：岡部宿 326

◎岡部宿のあらまし

岡部宿は東には宇津ノ谷峠、西には大井川という難所を控えていることから、平安時代後期より宿としての形を整え始めました。鎌倉・室町時代と発展を続け、慶長７年(1602)年に宿の指定を受けました。

岡部宿は当初、川原町・本町・横町の３町で構成されていましたが、交通量の増加から寛永年間に内谷村が加わり、明治５(1872)年１月の伝馬所廃止を機に宿駅制度が急速に機能を失うまで、東海道の要衝として栄えました。

江戸時代の作家、十返舎一九の滑稽本『東海道中膝栗毛』にも登場します。雨中の宇津ノ谷峠で滑って転んだ弥次さんと喜多さんが、増水のため大井川が川留めと聞いて岡部宿に投宿する際に一首『豆腐

山はみどり　野に花　人にはこころ

谷村が加わり、明治５(1872)年１月の伝馬所廃止を機に宿駅制度が急速に機能を失うまで、東海道の要衝として栄えました。

　江戸時代の作家、十返舎一九の滑稽本『東海道中膝栗毛』にも登場します。雨中の宇津ノ谷峠で滑って転んだ弥次さんと喜多さんが、増水のため大井川が川留めと聞いて岡部宿に投宿する際に一首『豆腐なるおかべの宿につきてげり足にできたる豆をつぶして』と交通の難所であった様子が描かれています。

◎当時の宿場の様子

　天保14(1843)年の調べによると約1500mの町並みの中に487戸・2322人が住み、宿場の両端には岡部宿の入口を示す枡形が設けられ常夜燈が置かれ